三重大学教育実践総合センター紀要　2005,　第25号，9－16頁

幼小連携接続問題の実践的研究報告その3

－児童間交流を柱とした実践の成果と教育課程改訂の展望－

河崎　道夫[*1]・権部　良子[*2]・浅田美知子[*3]
藤本　　尚[*4]・井本　賢治[*5]・吉田　京子[*6]

本研究会（幼小連携接続問題研究協議会）は、幼小連携問題について、①児童間交流と教員間交流、②教育課程の再編、③養成課程の改革を三つの課題として取り組んでいる。これまでは①全体の取り組みの計画を構造化するとともに、児童間交流の問題を中心とした実践的研究を報告してきた。今回は、①3年間にわたり継続的に児童間交流を進めてきた実践の成果と課題を総括すること、②2年目となる教育課程の改訂への取り組みの中間報告と今後の展望をまとめた。

キーワード：幼小連携、児童間交流、教育課程

Ⅰ．はじめに

本研究会では、幼小連携に取り組む全体的な課題構造を明らかにしながら、児童間交流に焦点を当てて実践に踏み込み、2年間にわたってその実践研究を報告してきた（河崎ほか、2003; 2004）。幼小の児童間交流は後に述べるように我々に大きな成果と確信をもたらした。そしてそれは、この交流実践の中で幼児、児童たちのそれまで見られなかった新しい姿によって得られたものであった。

と同時に、幼小連携接続問題は児童間交流を進めることにとどまるものではない。当初から課題として設定していた幼稚園、小学校の両教育課程そのものを改訂していくことこそが今後の取り組みの中心的な柱にならなければならないだろう。本稿では、児童間交流の成果を生かしつつ、継続しながら教育課程改革に取り組むという全体的な方向性を確認するため、以下の3点について報告する。

①昨年度から今年度にかけての児童間交流の取り組みの経過と成果をまとめる。②3年間の児童間交流の成果を理論的に総括する。③教育課程の改訂に向けて2年目から取り組まれた予備的作業の経過から今後の課題を明らかにする。

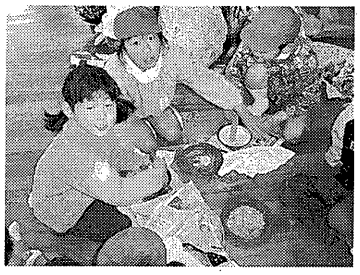
Ⅱ．実践の経過と考察

1．児童間交流の継続性を課題とした2003年度の実践

＜2月13日きなこ作りをしよう＞

10月にパーティーをして味わった枝豆が、12月には大粒の大豆になった。鳩やカラスに食べられないように急いで収穫した大豆の量は、みんなで1.9キログラムあった。どうやら、種を蒔いた時からの願い、枝豆を食べる、きなこを作るという事が叶いそうである。少し前の幼稚園餅つきで、きなこ餅を食べた経験のある幼児たちは、「これで、またきなこ餅が食べられるね!」と嬉しそうだ。そのことを、2年生A組の人たちに伝えると、「一緒にしよう。自分たちがきなこ作りの道具を用意するから」という返事が返ってきた。

そして、きなこ作りの当日、すり鉢、すりこぎ、ふきん、ふるい、手動コーヒーミル、新聞紙などを持って、2年A組の人がやってきた。“幼稚園の子どもたちが怪我をするといけないので、電気製品（フードプロセッサーやミキサーなど）は使わないでおこう”と話し合ったということであった。



焼き芋大会でも一緒に活動した幼児と小学生の活動グループ単位で集まり、さっそくきなこ作りが始まった。袋に入れて上からたたき細かくなったものを、すりこぎですりつぶすグループ、コーヒーミルで砕いた豆を、すり鉢ですりつぶすグループ、すり鉢に豆を入れ、その上にふきんを掛けてからすりこぎでたたき、細かくしてから、すりこぎですりつぶすグループなど、小学生は自分たちが考えてきた方法を試していく姿が見られた。そんな小学生の様子をじっと見る子どもたち。そのうち、「やってみる?」とか、「順番にしようね」「すり鉢を持ってね」と声をかけてもらって、自分たちも同じようにつ

＊1　三重大学教育学部幼児教育講座
＊2　三重大学教育学部附属幼稚園
＊3　津市神戸幼稚園
＊4　鈴鹿市立玉垣小学校
＊5　三重大学教育学部附属小学校
＊6　三重大学教育学部附属幼稚園

ぶしたり、動かないように手ですり鉢を支えたりした。よく知っている小学生ということから、「僕もやりたい」と自分から言える幼児もいるが、なかなか自分からは言えない幼児にとって、「じゃあ、次は○○ちゃんね」と自分の名前を呼ばれ、声をかけられることが嬉しかったようである。その笑顔がとても印象的であった。一方では、小学生自身がきなこを作ることに一生懸命になってしまい、なかなか幼児たちに代わってやれない様子、つまらなくなってきて場所を離れて遊び出す幼児たちの様子も見られたので、教師がお互いの気持ちを伝えたり、興味を持てるように話しかけたりして関わる場面もあった。

大豆を煎るだけでもかなりの時間が必要なので、あらかじめ煎っておいたものを用意しておいたのであるが、大豆は堅く、すりつぶすことにもかなりの時間がかかった。

30分ほどすぎた頃、2A担任よりそれぞれのグループの進行状況とできたものを集める場所の確認があり、その後また作業を続けた。あと15分間という時間設定の中、“きなこを作り上げたい”という気持ちから、小学生も幼児も今まで以上に力を入れているのがよくわかった。

授業の最後に、今日のきなこ作りをどう感じたかという話し合いの機会を持った。2A担任が実際にできたきなこを見せながら、さらさらしたきなこができたこと、しかし、量的にはたくさんできなかったことを話した。少ししかできなかったものの、さらさらしたきな粉を見ると、子どもたちから「わぁ～」と歓声が上がった。小学生から「堅いのでなかなかきなこにならなかった」「暇そうにしている子がいたので、もっと道具（布巾、すり鉢など）を持ってこようと思う」という意見、そして、たくさんきなこを作ることができたグループから、どのような道具でどのように作るとうまくできたという発表があった。そんな小学生の様子に、課題を自分で見つけ解決していこうとするたくましさを感じた。

＜2月16日　きなこ作り2日目＞

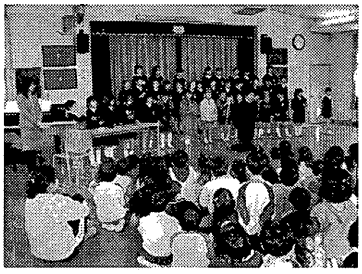
「金曜日の続きをしよう」と2Aの人たちがやってきた。そして、金曜日と同じグループに分かれてきなこ作りを始めた。金曜日と違うのは、道具（布巾、すりばち、コーヒーミル）が増えたことである。幼児たちなりの、大豆をすり鉢に入れ布巾を掛けてたたく様子、すりこぎですりつぶす様子も昨日に比べて手慣れてきた。幼児たちが暇そうにしていると、声をかけ何とか参加させようとする小学生の様子も見られた。

しかし、残念ながら、今回も全部の大豆をきなこにすることができなかった。そんな時、「2Aでやっておくから」という2Aの人たちの申し出があり、お願いすることにした。

＜2月20日　音楽劇「たぬきの糸車」の観劇をする＞

2A担任から「子どもたちが、幼稚園の子たちに音楽劇をみせたいと言っているのだがどうだろうか」との誘いがあった。幼児たちはその誘いをとても喜んで受けとめ、20日を待った。

当日、2Aの人たちが、歌を歌うことで「たぬきの糸車」の話を展開していく中で、いろいろな楽器を効果音として取り入れたり、小道具を工夫したりなど、人を代わりながらみんなで力を合わせてやっていく様子を、幼児たちはあこがれの表情で見つめていた。そして、終わったとき、一人の幼児が「あぁ、小学校へ行ったらこんな勉強ができるんだね。早く小学校に行きたくなったよ。わくわくする」とつぶやいた。



小学生にとっても、自分たちの音楽劇を誰かにみてもらうことは嬉しいことであり、そのことがやる気につながるのだろうが、同時に幼児たちにとっては、小学校入学を目前にした今の時期に張り切っている小学生の姿を見ることで、小学生の姿に自分の姿を重ね合わせ、さらに小学生にあこがれ、小学校に対する期待感につながったようである。

＜3月8日　きな粉・みそ汁パーティー＞

2A担任から「今まで、大豆もさつまいもも幼稚園にもらっていたので、冬野菜でみそ汁を作りごちそうしたいとこどもたちと話している」という話があった。その数日後、2Aと兄弟姉妹関係の幼児たちから、「2Aが、今までたくさんごちそうになったから、みそ汁を作って幼稚園に持ってくるんだって。その時、お餅も持ってくるからきな粉餅にして食べようよって言ってた」という話があると、幼児たちは、口々に「やったー」と大喜びであった。

そして、3月8日、大きなみそ汁のお鍋を持って2Aの人たちがやって来た。みそ汁の良い香りがしてくる。幼児たちは、「わー、いいにおい」「おいしそうだね」と話しながら、大急ぎで机を出しイスを並べて用意をする。一口食べるとすぐに、近くに座っている小学生に「おかわりある?」とたずねたり、「すごくおいしいよ。ありがとう」と言ったり、またきな粉餅を食べて「やっぱり、自分で作ったきな粉はおいしいね」「味が違うね」と言いながら食べたりする様子が見られた。

何日かして、幼稚園のそばを通った下校途中の2Aの人たちが、幼稚園児を見つけ「おみそ汁はおいしかった?」と声をかけていた。幼稚園児の「おいしかった。おかわりがしたかったよ。」という声に「ああ良かった」とにっこりする小学生たちである。

小学生が、幼稚園児から「おいしかった」と言う声を聞き、自分たちがおいしく作れたこと、自分たちが役に立ったことの嬉しさを感じていることがよくわかった。

＜3月10日　一緒におにぎりを食べよう＞

劇遊びの参観、音楽会など、何か行事があると、“2Aにも声をかけたい”という幼児たちである。“幼稚園で作った米をみんなで食べよう”ということを計画したときも、すぐ「2Aの友達と一緒に食べたい」という声があがった。

そこで、10日に自分の分と2Aの友達の分のおにぎりを作って、「喜んでくれるかな?」「おいしいかな?」と言いながら小学校へ持っていった。2Aの友達から「ありがとう」「すごくおいしい」と言ってもらい、うれしそうな幼児たちであった。

幼稚園児にとっても小学生にとっても、誰かに「ありがとう」と言ってもらうこと、嬉しい表情を返してもらうことで、自分が役に立っていることを実感するのである。

2．児童間交流の継続と拡大、安定化を課題とした2004年度の実践

(1) 小学校の視点から

2年生B組の生活科は、「2年生の生活科で何をしたいか。」を話し合うことから始まった。大きく18個もの「したいこと」が出され、話し合った結果、「1年生とか、ほかの学年の人に見てもらいたいから。」「みんなで楽しく遊べるから。」などといった理由で、「おばけやしき」をつくることに決まった。

理由の1つ目である「1年生とか、ほかの学年の人に見てもらいたい」の「ほかの学年」には、「附属幼稚園の子どもたちに」も含まれている。おばけやしきを楽しんでもらったり、「すごい。」と言ってもらったりしたいのであろう。とにかくこのようにして、今年度の生活科が始まったのである。

「おばけやしき」をつくるために子どもたちは、自分たちで必要な材料を用意し、他の学年や附属幼稚園の子どもたちが驚き、楽しんでくれるようなおばけやしきを目指して、準備を進めた。活動を進める中で「材料が足りない。」「考えていた仕掛けが、思い通りにできない。」など、様々な問題に出会うであろう。そのたびに子どもたちは、「どうしよう。」と思い、指導者は「どうすればよいのか。」を投げかけることになる。ここで出会った問題を解決するためにあれこれ考え、話し合い、解決策を見つけ実行していくことを、本単元で何よりも大切にしたかった。

本単元で大切にしたいことはもう1つあった。それは、同じ学級の仲間だけではなく、1年生をはじめとする他学年の子どもたち、さらには附属幼稚園の子どもたちも「おばけやしき」に招待したいと考えていることである。一般論ではあるが、このごろの子どもたちは周りの人たちとかかわることが苦手であるといわれている。特に、異年齢の子どもたちと接する機会が少ないこともあり、うまくかかわることができないというのである。

学級の子どもたちを見てみると、1年生の子どもたちと一緒に帰り、危ないことをしそうになると注意をしたり、バス停まで連れていったりしている子どもがいる。しかし、上の学年になると、接する機会が少ないというのは事実である。掃除場所によっては、5、6年生の子どもたちに掃除の仕方を教えてもらったり、ふざけていたら注意されたりといったかかわりはあるが、教室掃除や給食も1年生のときと違い、自分たちですべて進めていくため、上級生とかかわる必要感は感じていないのではないだろうか。

しかし、他学年の子どもたちとかかわる機会を持つことは、子どもたちにとって得ることは多いであろう。それは、日常接することが少ない子どもたちの、思いもしない考えや願いを知ることができ、それが刺激となって、自分たちの活動を振り返ることにつながるからである。例えば、「こんなおばけやしきではおもしろくない。」「もっとこうすると、こわくなる。」といった声を聞くことで、よりよいものにしていこうという新たな願いが生まれることが考えられる。

さらに、分かり合えている同じ学級の仲間とは違う子どもたちに、自分たちの思いを伝える、いわゆるコミュニケーション能力が育つものと考えている。特に、自分たちより年齢が下である1年生や、幼稚園の子どもたちに分かってもらうためにはどのようにすればよいかを考えることで、分かりやすく話すためには、短い文で、順序立てて話すことが大切であることなどに気付いてくるであろう。この単元を通して、このような力も、子どもたちにつけていきたいと考えたのである。

こうしておばけやしきの準備を進めてきたが、なかなか「公開」するには至らず、とうとう1学期の終わりになり、何とか他の学年の子どもたちを招待することができた。附属幼稚園の子どもたちを招待できたのは7月15日であった。このときは、おばけやしきだけではなく、その後グループに分かれて学校を案内したり、一緒に遊んだりする活動も取り入れた。

とても暑い日であったので、おばけやしきにしていた「古い小屋」の中はうだるような暑さであった。子どもたちは汗びっしょりになりながら、何とか怖がらせようとしていた。その中で、幼稚園の子どもたちを優しく中に入れてあげたり、出るときに抱っこしてあげたり、頼もしい姿をいくつも見ることができた。

グループに分かれての活動では、中腰になって、幼稚園の子どもの目線に合わせて話をしていたり、手をつないであげていたり、自分のお茶を「のどが渇いた。」という子に飲ませてあげていたり、何とも言えないような優しさ、お兄さん、お姉さんとしてのかかわりができており、うれしく思った。

暑さのため、幼稚園の子どもたちも少ししんどそうであったので、なかなか思うようにならず、困った様子を見せる子どもたちもいたが、それはそれで、よい経験だったのではないだろうか。次につながる「大変さ」だったはずである。

この「おばけやしき」がきっかけとなり、2学期も交流は続いた。附属小学校で行われる「附小文化祭」の準備の様子を幼稚園の子どもたちが見に来て、いつの間にか一緒に遊んでいたり、どんぐりや松ぼっくりなどを文化祭でたくさん使う必要があることから、幼稚園の子どもたちが拾ったどんぐりや松ぼっくりを「文化祭で使ってね。」と、届けに来てくれたりしたこともあった。

附小文化祭の準備をしているところに幼稚園の子どもたちが遊びに来たとき、はじめはとまどいを感じており、少し距離をおいていた。ところが、幼稚園の子どもたちがどんどん中に入ってくることで、必然的にかかわり合う場面が生まれ、共に活動するようになった。例えば紀平や田中は、賞品に使う折り紙を一緒に折ってもらっていた。それだけではなく、折り方を教えたり、プレゼントしたりしていた。ドングリごまの回し方を自慢げに見せていた小林や小道の姿。「すごい。」という言葉でさらに得意げになっていた。ここからかかわりは深まるのであろう。ボーリングをさせてあげ、木の実をあげていた子どもたち。もらった木の実をうれしそうにしてもっていた幼稚園児の姿は、彼らにとっても喜びの共感となり、その後も意欲的に活動をすすめるようになった。

幼稚園児の目線に立って、顔を寄せながら遊び方を説明する姿は、普段いたずらばかりして教師に叱られることの多い姿からは予想もできない、優しいまなざしを見ることができた。頼られることで、答えようとし、そこに温かい関係が生まれるような気がする。ちょっとしたことでも「ありがとう。」とうれしそうな表情を見せる幼稚園児のすがたに満足感と自信が生まれ、さらに優しくなれるのであろう。

「今度は幼稚園に遊びに行きたい。」と林がつぶやいた。つながり始めた瞬間である。このつぶやきを大切にしたいと考えた。

文化祭に幼稚園の子どもたちが来てくれたとき、2Bの子どもたちは一気に活気づき、生き生きとし始めた。幼稚園の子どもたちは、彼らにとっては「特別」なのである。くじがはずれでも、「はずれだとかわいそうだから。」ということで「当たり」にしていたり、どんぐりゴマの作り方を一生懸命教えていたり、幼稚園の子どもたちのために何ができるかを自分で考え、楽しませてあげようという気持ちにあふれていたのである。「すごい。」という言葉が自信になり、「ありがとう。」という言葉で満足感が生まれ、交流を重ねるごとに、つながりができてきているように感じる。

文化祭後、「今度は幼稚園に遊びに来てね。」ということで遊びに行き、転がしドッジやリレー、どんぐりを使っての遊び、折り紙などを一緒に楽しんだ。

その時の、子どもたちの感想を紹介したい。

> わたしは、ようち園の子が、おり紙をおっていたので、友だちになれるかなと思って
> 「名前はなんていうの。」
> と聞いてみました。すると、
> 「さくら。」
> と答えてくれました。そしていっしょにやはたさんの弟とそのさくらちゃんと、もう一人の女の子とおにごっこをしたりころがしドッチやリレーをしました。とても楽しかったです。

> わたしがてつぼうをしていたら、友だちのさほちゃんが「すごい。」と言ってくれたのでうれしかったです。

> ねんちょうさんか、ねんちゅうさんが、そちらから「また、来てね。」と言ってくれたのでうれしかった。
> エイサーあしびの時、おどってくれたのでうれしかった。
> ようち園の子に、体そうを見せてもらってうれしかった。
> また学校にも来てほしいし、ようち園にもいかせてもらいたいです。

「友だち」という言葉に、つながりの確かさを感じる。2Bの子どもたちにとって、幼稚園の子どもたちは、「友だち」なのである。

幼稚園との交流のよさは、次の2つだと考えている。

1つは、教室だけでは見ることのできない子どもたちの姿を見ることができることである。子どもは多面的の捉えなければいけないと言われるが、その1つの場になった。

2つは、人とのかかわり方を子どもたちが学ぶということである。つまり「声をかける」ことで「友だち」になれ、わかりあえるということを学んだであろうということである。確かに声をかけることは勇気がいることである。しかし、それを乗り越えることで人とつながり合えるという大きな喜びを得ることができる。逆に声をかけたものの反応がなかったとき、さみしさを感じた子どももいるであろう。これも大切な経験である。この子は他の人から声をかけられたとき、きっと声をかけ返し、仲良くなろうとするであろう。なぜなら「さみしい」という経験をしたからである。

このように、多くの人と関わる機会を、これからも持っていきたい。

(2) 幼稚園の視点から

＜6月当初＞

2Bの子どもたちが小学校裏の小屋をおばけ屋敷にしたいと話し合っている事、そこに園児達を招待したいという意向を持っていることが担任から知らされた。年長担任は、おばけ屋敷の製作途中を見せてもらいたいことを申し込むが、2Bの子どもたちの思いの中にはできあがったおばけ屋敷でびっくりさせたい、楽しませたいという気持ちが強くあり、後日の楽しみとなった。

＜7月15日　附小裏のおばけ屋敷へ＞

楽しみにしていたおばけ屋敷に年長児達が行く日がやって来た。「おばけ屋敷」という言葉には魅力があり朝から楽しみにしている様子が見られた。始めて小学校へ足を踏み入れる子どもたちも多く、期待の中にも緊張した様子が伺えた。

園庭に並んで準備していると2Bの児童2名が先生と共に迎えに来てくれた。2年生なりに考えてくれたいろいろな配慮を、「約束」として皆で聞き、グループ毎に担当の児童達の案内によりおばけ屋敷に入っていった。

実際に入ったおばけ屋敷は入り口から出口が見通すことが出来た。暗いと年長児達が怖がるからという2年生の配慮がされてあったためか「おばけ屋敷」自体の楽しみは少ないようであったが、出口で抱き上げてくれたり、優しく声をかけてくれたり、そのあとグループ毎に年長児達の希望を聞き取り、学校の案内してくれたことが緊張を伴いながらも嬉しかったようだ。その関わりの中で、年長児にお茶を分けてくれたり、教室の自分のイスに座らせてもらった子もいて2Bの児童達の優しさにたくさん触れることが出来たようであった。

だが、この交流はすぐに夏休みが始まってしまったことと、夏休みが開けてからは教育実習があり、児童間交流の実施には期間が空いてしまう事となった。

10月の実習明けの週に連絡を取り合い、事前の打ち合わせを実施した。そこで附小文化祭に向けて活動する2Bの子どもたちの様子に触れさせて欲しいと頼んだ。

＜10月26日　文化祭の準備をする2Bを訪問＞

授業中に学校を訪問するということで年長児達といろいろな約束を考え、他のクラスの邪魔にならないように静かにしようと決めた。それぞれが上靴袋を手に持ち2Bの教室近くの玄関に靴を並べていると2Bの子どもたちが「どうぞ!入っていいよ!」と誘いに来てくれた。教室に入ってみるとまだまだ試行途中のいろいろな遊びが考えられたり製作をしているところで、年長児達もいつも目にするドングリや松ぼっくりが、紐ごまになったりボーリングになったりくじ引きの景品やいろいろなゲームの大切な材料になっていた。身近な折り紙も景品用に折られていて、児童に折り方を教えてもらったりする姿も見られいろいろな場面で自然な交流が楽しまれたようであった。園児の中には2年生がそれぞれ自分達の活動に夢中になっている隙間を縫うようにそっとイスに座って見る姿も見られた。教師と目が合うと照れたような笑顔を見せすぐ立ち上がって場を離れてしまったが。

帰る時間になると、年長児達のポケットがいっぱいになっていて、くじ引きの景品のドングリや折り紙ををたくさんもらったと笑顔いっぱいに教えてくれた。

幼稚園にもどる途中もそれぞれがどんなことをさせてもらったのか口々に言いとても楽しかったと話す。「文化祭にも呼んでもらったよ」と個々に招待された子も多くもうすでに参加する気満々であった。けれどK児が「こんなにいっぱいドングリもらってきたら足りなくなるんじゃない?」と心配そうに教師に伝えに来た。その言葉を皆に返すと「幼稚園にもいっぱい落ちているから集めておいてあげる!また公園にドングリ拾いに行くからそのときにいっぱい拾ってあげる!」と言う声と「楽しかったからお礼のお手紙描きたい!」と言う声も上がり午後には園庭にドングリ拾いにでかけたり、手紙を書いたりとそれぞれに気持ちを持って行動する姿が見られた。

降園後、担任の先生にドングリをプレゼントに行ってもよいかを尋ねると、きっと大歓迎してくれるだろうとの言葉を受け取る事が出来た。

＜11月4日　全園児で偕楽公園に年少、年中児達と手をつないでドングリ拾いに＞

たくさんのドングリが落ちていて大喜びの子どもたち。年長児達はそれぞれの入れ物が満杯になるまで集め栗のイガや松ぼっくり等、大収穫でもどってくることが出来た。たくさんの収穫に気をよくし家族に見せたくなった子も多く、子ども達の意志を尊重する言葉をかけ、持ち帰る子、2Bにプレゼントできる子、保育室においておきたい子などそれぞれで考え決めていった。

＜11月5日　20分休みにプレゼントを持って!＞

20分休みにはいる前をねらってプレゼントに出かけた。授業が終わった頃、教室のテラスの前に並ぶと児童達がテラスに集まってくれた。当番さんが集まったドングリを2Bの児童に渡し、「文化祭に使ってください」と伝えると「ありがとう」と受け取ってくれた。先日来子どもたちが描き貯めていたお礼の手紙も一緒に2Bの子どもたちに渡すことが出来、充実した様子を見せる子どもたちだった。

「みんな喜んでくれたな!」と幼稚園にもどってからも思ったことを口々に話し、文化祭当日に期待を膨らませながら、楽しい時間を共有しあうことが出来た。

＜11月10日　附小文化祭に参加＞

2Bの教室にみんなで訪問することも2回目になり、上靴を用意したりする様子にも手際よさを感じさせ附小へ向かった。それぞれ前回遊ばせてもらったコーナーや、知っている児童の学年を見て回りたいと求めてくる。た

くさんの保護者や児童達も参加していたため集団で行動するには無理があり、集合の時間を決めて1階部分の低学年の教室の好きな場所で過ごすことにした。

2Bの教室の入り口には先日手渡した手紙が掲示されていて交流の様子が見てもらう参加者によく分かるように工夫されていたが、年長児達は期待と緊張のためか掲示には全く気づく余裕なく覗き込むように教室に入っていった。児童達のコーナーは前回に遊ばせてもらったものより工夫されていたり、作り直されているものもあって、児童達が工夫改良し本日に向かったことが伺えた。年長児達はたくさんの保護者の間を縫うようにいろいろなコーナーや仲良くなった児童達を求めていったり、教師と一緒に参加し楽しむ事が出来た。

幼稚園にもどり、好きな遊びの合間に楽しかった事を手紙に書く姿が見られた。「こんどはようちえんにあそびにきてください」と書きたいと求める子どもと一緒に、あいうえお表を見て字を捜しながら楽しかった気持ちを共有していった。

＜11月11日　2B幼稚園に遊びに来る＞

これまで附小へ遊びに行き、お礼のお手紙の中で何度も幼稚園で一緒に遊びたいと求めてきた思いを2Bの先生や児童達が受け止めてくれた。行き来の時間も考え、約30分くらいの予定で幼稚園全体を遊びの場とすることとした。

幼稚園に来てくれた事で年長児達はこれまで見られないような積極的な様子で遊びを提案したり手を引っ張っていき、今自分達が楽しんでいる遊びに誘い一緒に楽しむ姿が見られた。園庭の真ん中でのリレーごっこや転がしドッジ、総合遊具を中心にした鬼ごっこ、保育室内での折り紙や製作など2Bの児童達ものびのびいろいろな場で遊びを展開し楽しむようすを見せる。そして、園庭で出会った年中児、年少児達との出会いもたくさんあったり、兄弟関係のあるクラスへは積極的に訪問し全クラスにわたった関わりが見られることとなった。

結局予定していた時間を大幅に過ごし、大満足で帰っていった2Bの児童達。別れ際には「また来るね」「またきてね」の双方の求め合う声が交わされた。事後の話し合いでは学校生活では見られない表情の見られた子どもたちがたくさんいたことや、園児達も2年生に憧れの気持ちを新たにしていた姿を報告し合うことができた。

＜11月16日　幼稚園で遊び、踊りを教え合う＞

幼稚園で遊ぶことも2度目となったことから、2Bの児童達は積極的に遊びたい所へと出かけていく。前回はまだまだ傍観していた年少児や年中児達も少し慣れたのか関わりを求めていく様子も見せる。年長児が一緒にリレーを楽しむ中に年中児も加わり、担任と共に年少児も加わった。不安を表すより、楽しい雰囲気を共有したいという思いを感じ取れる関わりがたくさん見られた。年少児達には2年生らしい配慮を持った関わり方を随所に見せながら、また年長児達には少し背伸びをしたりと、いろいろな姿を表せる2年生に、年長児達は憧れの気持ちをより強くしていったようである。

十分に遊んだあと、2Bの児童達は運動会で踊った「エイサー」を見せてくれる。園児達も全員が知っていて踊れる「元気が一番一等賞」の踊りを2年生を誘い踊って楽しむ。それぞれの子どもたちが、2年生が見せてくれたように元気に踊りを見せようとはりきっていた。その後近くにいる子どもたちと握手を交わし附小にもどっていく児童達を皆で見送る。事後の報告の中で、個人の名前がたくさんでるようになり、次回への思いをふくらませる言葉もたくさん聞かれたとの事、今後への期待も持てる交流となった。

＜3年生の担任教師が幼稚園へ＞

昨年度継続した交流を積み上げ進級した3年生の担任より、3年生全員で交流が持ちたいという申し出があった。昨年度の2Aが進級し3クラスに分かれたことで児童達からでてきた要望なのだろうか?教師間で話し合いを持ち、設定した遊びを提案されたが人間関係が生まれていないと年長児でさえ不安になることを伝え、まずは園内で関わりの糸口を見つけて欲しいと求めた。2学期末1クラスの児童達が好きな遊びの場面で過ごす。

3学期には3年生全体との交流を具体的に進めていく予定であり、2Bとの給食交流も予定されている。

これまでの流れを受けて今年度も交流・連携がなされることになった。矢張りそれにはこれまでの積み上げられた何かしらの成果が小学校の教師たちにも理解され始めたのだろうと思う。年長児の側から見れば、日常生活の中で関わりの少なくなった大きい人たちとの交流が、園内での対等な関わりや小さい人との関わりにプラスされて経験できることの意義は大きく、今年度異校種間の交流だけでなく園内の異年齢の交流をより活発にする中でも関わり方に変化が見られたり、遊びの場を共にし楽しむ姿がいろいろなところで見られるようになっている。また、教師間でもお互いの職員室に足を運ぶことに抵抗感が少なくなっていることを実感した。まず子どもたちの思いを大切にすることを念頭に、お互い無理のない計画を考え交流を積み重ねることで成果は確実に積み上げられていることを確認する事が出来た。

Ⅲ. 3年間の児童間交流の成果

予備的試行の期間も含めると4年近くにわたり幼小の児童間交流を着実に進めてきた。初期のイベント中心的な取り組みから、2003年度には幼小クラス間の恒常的な交流へと展開してきた多くの実践の中で、常に確信となり続けてきたことであり、これからも実践の進行を支

え続けるであろうと思われることがある。幼小それぞれの校園あるいはクラスの中だけにとどまっていたら見られなかったであろう「子どもの姿」こそが、最大の成果であり、我々の確信のもとである。

まず、幼児たちにとっては、人形劇を見せてくれたり、手づくり楽器の演奏をしたり、力強く草や枝豆を抜いたり、大豆をひいて粉にしたり、おばけ屋敷を演じ案内する小学生の姿を間近に見ることができた。同じ場を共有する中で自分たちの一歩前を力強く進む小学生の姿はまさにリアルな憧れのかっこうの対象であった。演奏で見たビュンビュンごまに挑戦心をかき立てられ、「あんなことをやってみたい」と悪戦苦闘を始めた例はその一つの典型であろう。

小学生たちは、自分より小さい子たちに何かをしてあげようとすることで、普段では見られない緊張と真剣さを示した。きなこをすりつぶす時に、「幼稚園の子は機械（電気製品）を使うと怪我をするといけないから、すり鉢とすりこぎを使おう。」という意見に見られるように、「わかるだろうか」「できるだろうか」と心配して準備したりした。一方で、「しっぽとり」をして遊ばせてやろうとして、「意外に手強い幼児」を発見したり、「畑にたこやき」に苦笑したりするなど、幼児の意表をつく反応に驚き、苦笑し、笑ったりした。教室では見ることのできなかったこうした姿に教師たちは「あの子にこんな面があったのか」と驚くことがしばしばであった。

それは、異年齢の子どもの集団的かかわりが本来持つ「リアルな憧れと自己確認の連鎖」ともいうべき世界に生きる子どもの姿であると思われる。地域の異年齢子ども集団が失われてきたことが指摘される（藤本、1974）ようになってすでに久しい。その傾向は地域共同体の崩壊と少子化の波に洗われ、いっそう進行している。その中で遊び文化の伝承が、したがって子どもらしい遊びの世界が衰退してきたてきたこともこれまでも多く指摘されてきた。それ自体大きな問題であるが、それとともに子どもたちの結ぶ人間関係が大きく変容してきたことも見逃せないことである。子どもたちは幼少時から近隣と切り離された核家族というきわめて狭い人間関係の中で生活し、外に出れば同年齢集団の競争的関係に投げ込まれる状況が進行してきた。一方で、情報化社会の急激な進行にともない、子どもたちが抱くなりゆく人間像、つまりは憧れの対象が、身近でリアルな人ではなく、テレビや漫画やインターネットの中で躍動するヒーロー、ヒロインに画一化されていく事態も進行してきた。リアリティーのある人間関係の希薄化とバーチャルな憧れとが、今日の子どもの育ちの問題を引き起こしている一つの大きな要因であることは間違いないだろう（河崎、1996、1997、1998、2003）。幼少の「段差」は、異なる教育機関間の移行があれば当然なにがしかのレベルで存在するはずであるし、存在してよいものであろう。それが子どもの成長発達にとって無視できない「断崖」となってきたのは、子どもを取り巻く社会が、子どもが成長発達していくうえで根本的な原動力となる「リアリティのある憧れと自己確認の連鎖」を断ち切るような変容を見せてきたからなのである。

このような実情を前に、今全国で幼稚園や学校であるいは様々な保育教育機関で、子どもたちの多様な人間関係を保障する取り組みが行われている。様々な技術や知識を持った地域の名人や達人やお年寄りとのふれあい、中学生や高校生の保育参加、父母たちの保育や教育への参加など、各地で進められている取り組みの意義は大きい。それは子育ての分野においてかつての地域共同体のよき側面を現代的に再生する試みともいえよう。本実践研究の児童間交流の取り組みもそうした流れの中の一つに位置づけることもできるのである。しかも本実践研究の児童間交流の舞台は同一キャンパス内のことであり、また幼稚園卒園児の大半がそのまま小学校に連絡入学する。また本実践においては、卒園した小学生が登下校時に通る場所に掲示板を設置することもできた。他の取り組みがややもすれば一過性のイベントに終わりがちなのに比べ、継続性を追求しやすい状況であったことも重要なことであろう。交流を経験した幼児が小学校に進み今度は自分たちがかつて通った幼稚園に大きくなった姿で幼児の前に立つことができるし、幼稚園の出来事を写真も含めた掲示板で想起することもできる。まさに「連鎖」を多様な新しい形で再生する展望が開けていると言ってよい。

児童間交流は必然的にそれを実践するための幼小の教師間の交流を生む（秋田、2002）。互いに子どもたちの生き生きとした姿、新しい姿を見たいために教師間の交流が否応なく進む。今後は、空気のようにあたりまえに幼小の児童間交流が継続されていくことが必要であり、その基盤は作られたと考えてよいだろう。

Ⅳ. 教育課程の改訂と今後の課題

児童間交流は大きな成果と確信を生み出した。だが、その内容はそもそも教育課程そのものに生かしながらより構造的、系統的に定着したものにしていかなければならないだろう。当初から幼小連携は教育課程の改訂と創造を課題としていた。それは児童間交流を進めていればそのまま自動的に実現できるわけではない。2003年度には児童教師間交流を進めることと並行にこの課題を独自のものとして直接取り組み始めた。いくつかの前提的視点が考えられる。第一に教育課程の接続といっても、小学校の教育において大きな柱となる教科領域の分け方や内容をそのまま低年齢向けに編成すること、あるいは

小学校の教育課程をそのまま前提にして年長幼児期にその準備をするための教育内容を作ることは主要な柱ではない。もちろん限られた範囲で、幼児期にふさわしい形でありうるとしても、それは何かが限定的に検討されねばならないだろう。逆に、小学校の低学年の教育課程を幼稚園教育の単純な延長にすることでもないことは言うまでもない。第二に、教科領域のみならず、生活・学習時間の区切り方（例えば時間割やチャイムの問題）、生活学習空間（教室と机の配置の問題など）、個々の生活習慣の形成（身辺整理、教室の整理・清掃など）友だち関係（トラブルの解決やクラス集団活動）など生活の送り方そのものの接続のありようが検討されなければならない。

このような視点から、第一に、相互に現状を知り合うために体験しあうことを進めた。児童間交流によって必然的にそのことはなされるが、幼稚園教師が授業を参観する経験、共同の県外研修の参加、双方の公開研究会、研究授業、研究保育への協力なども追求され実施された。幼稚園の公開研究会で小学校教師がシンポジストとなったり、フロアーからも発言したことは参加した他の幼児教育・保育の保育者におおいに刺激となったようである。

第二には、教育課程接続の手がかりをうるため全体的に相互の教育内容を俯瞰しながらつきあわせる作業を開始した。まず幼稚園側で、年長幼児の一年間における活動内容（保育内容）を活動領域別にリスト化したものを作成した。「領域」として「遊び・学習に関わる種々の活動・知識・技能」と分けそれらをさらに細分化して項目化し、それぞれについて「活動内容と子どもの姿」「達成目標」「環境・指導方法」を記入した（杉澤・河崎試案）。さらに幼稚園全体でそれを細部にわたって修正手直しをした「連携教育課程表」を作成し、同時に同じものを時期別に整理し、「年長児の生活」として2004年度幼稚園公開研究会で発表した。この一連の作業は幼稚園の教育課程の見直しとして大きな意義はあった。

またこれらはいずれも小学校教師に配布された。今のところ小学校の生活科や総合学習で取り組む手がかりとして使われることには有効な課程表となっている。しかしこれにもとづいて教育課程の接続に直接どう生かしていくかは課題である。当然小学校側からの連携を視野に入れた教育課程づくりが必要となってくる。しかし連携の教育課程の改訂や創造は、本研究の最初の報告（河崎ほか、2003）でも述べたように、教育要領（幼）と学習指導要領（小）の性格と内容の違いの制約があり本来的な困難がある。やはり、児童間の交流を継続的に行っていくことを基盤としながら、小学校全体にかかわる教育課程の検討の中で位置づけられていくことになろう。現在、四附属校園（中、小、養、幼）全体で教育課程検討委員会が組織され研究活動を進めている。これと連携しながら一歩一歩進めていくことが重要であろうと考えられる。

文　献

秋田喜代美　2002　幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例　小学館

藤本浩之輔　1974　子どもの遊び空間　NHK ブックス

河崎道夫　1996　子どもの遊びの変化と自我の空洞化「現代と保育」誌　第40号　ひとなる書房　P.72－81

河崎道夫　1997　発達を見る目を豊かに－憧れとささえをはぐくむ保育－　ひとなる書房

河崎道夫　1998　生きる手応えの喪失と大人の責任「現代と保育」誌　第44号　ひとなる書房　P.4－13

河崎道夫・朝田かおり・北谷正子・杉澤久美子・西原信孝・藤本尚・松本敬子・山崎征子・山田康彦・吉田京子　2003　幼小連携接続問題の実践的研究報告　－児童間交流・教師間交流の取り組みを中心に－　三重大学教育学部教育実践総合センター紀要　23号　P.55－62

河崎道夫　2003　学童保育の遊び－意味と実践－　学童保育研究4号　学童保育指導員専門性研究会　かもがわ出版 P.101－111

河崎道夫・吉田京子・北谷正子・藤本尚・権部良子・浅田美知子　2004　幼小連携接続問題の実践的研究報告その2　－児童間交流の恒常化の取り組み－　三重大学教育学部教育実践総合センター紀要　24号　P.145－154

※本研究は2002年度三重大学教育学部重点経費、及び2004年度三重大学教育学部学部長裁量経費の補助を受けて行われたものである。